

廿日市史跡建造物群

廿日市市郷土文化研究会

平成28年3月2日

曹洞宗応龍山 洞雲寺 廿日市市佐方 1071 番地の 1

長亨元年(1487) 僧金岡用兼禅師開祖 本尊釈迦如来坐像
 桜尾城主で佐西郡の神領を支配した厳島神社の神主であった藤原教親・宗親(のりちか・むねちか)父子により藤原氏の菩提寺として創建。境内には藤原興藤墓、毛利元清夫妻墓、桂元澄墓、陶全羨首塚がある。



佐方八幡神社 廿日市市佐方

厳島神社と同時期の鎮座と伝わる。農耕の神で佐方の氏神である木造神像、薬師如来坐像が祀られている。厳島神社神主家、桜尾城主であった藤原氏が崇拝していた。文政8年(1825)完成の廣島藩領内の地理や歴史を記した「芸藩通志」によれば、400 有余年前に毛利家より神田の寄進があった。拝殿には三十六歌仙額が奉納されている。以前は佐方だけでなく廿日市東町の人も氏子であったが、廿日市天満宮が廿日市の氏神として祀られるようになり、佐方の氏子により守られてきた。桜尾城址西側の地にあった石州津和野藩御船屋敷に生まれた、蝦夷地海路測定に初めて成功した「堀田仁助」寄進の一对の石燈籠がある。



岩戸尾城址 廿日市市佐方本町 佐方本町の山陽女学園の地には中世のころ岩戸尾城があった。ところが山陽女学園の開園で城跡は消滅した。岩戸山は当時海に面しており要害の地で、陶晴賢の父興房が約1年間在陣しており相当の施設があったものとみられる。



西国街道壱里塚跡 廿日市市佐方本町

岩戸山の崖下を進むと、五日市村と廿日市村との村境である。村境の五、六十米西が一里山である。

「此一里山は広島船場より三里 周防尾瀬川境より六里前後三十 六丁」とある。往時は道をはさんで二基の基段があり、その上に木が植えてあるのが明確に描いてある。

(上段図:行程記 赤枠 2ヶ所内)。



松は、針葉樹としては温度の適性が広く、亜熱帯や熱帯に分布する種でも摂氏-10度程度の低温・組織の凍結には堪えて生存するということから、街道松としたのではないかと推測。



街道松 桜尾本町

江戸時代、京都から江戸に都が移り、江戸を中心とした五街道（東海道・中仙道・日光街道・奥州街道・甲州街道）に次ぐ脇街道として寛永10年(1633年)参勤交代制度の確立とともに西国大名、長崎奉行、幕府の要人の往来する旧山陽道として、整備された。



広島藩は旧山陽道を「西国街道」と称した。

街道の整備は、宿駅宿場を設置、道幅2間半(4.5 丈)とし、1里(4 町)ごとに街道の両側に土を盛り、榎木などを植えて、距離を示す目印とした1里塚を設けた。

廿日市では、1里ごとに1里塚松があり、街道の両側に3間(5 丈強)ごとに街道松が68本植えられていた(文政2年(1819))が、現在では1本だけが残っている。

桜尾城址・桂公園 廿日市市桜尾本町 廿日市にはかつて「尾」

という名のつく七つの山城があった。

『芸藩通志』には、古戦場跡・折敷畑(宮内)から東に向かって続く七つの尾根にあった七つの丘に「桜尾、宗高尾、谷宗尾、藤掛尾、越峠尾、岩戸尾、篠尾」の山城があったとされる。



この桜尾城址(現桂公園)は、七つの山城の本城とされ、築城当時は三方を海に囲まれた要害であった。毛利元就との厳島合戦(1555年)に破れ、自害した陶晴賢の首実検もこの桜尾城で行われた。

廿日市市で最も古い公園で大正2(1914)年5月8日に開園。桜尾城主であった桂元澄の子孫、桂太郎公爵が桜尾城址を永久保存するため、大正元年(1912)年当時の廿日市町に寄贈したことから桂公園と名づけられた。



妙見社 廿日市市桜尾本町(桜尾城跡北) 古代中国の思想では、北極星(北辰とも言う)は天帝(天皇 大帝)と見なされた。これに仏教思想が入り「菩薩」の名が付けられ、妙見菩薩と称するようになった。妙見菩薩は、北極星(北辰とも言う)を神格化した姿とされ、北辰菩薩とも呼ばれる。国土を守り、災いを除き、人の福寿を増すとされる。「菩薩」とは、「悟り(真理)を求める者」



の意であり、「妙見」とは「優れた視力」の意である。

大内氏の氏神である氷上山興隆寺妙見社(山口市)を分祀。足に蛇が巻き付いている。

<http://www.ensenji.or.jp/contents/facility/bosatsu/>

『妙見信仰をめぐる』妙見シリーズ8 10頁より引用。



石州津和野藩御船屋敷旧址

廿日市市桜尾本町

元和六年（1620）石州津和野藩亀井家（4万3千石）は、廿日市に「船着ノ蔵屋敷」を置いた。この時代はまだ参勤交代などに利用できるような宿泊施設はなく、廿日市商人 鳥屋七郎右衛門宅へ宿泊していたがなにかと不便につき、津和野藩は、御往来御本陣鳥屋市右衛門・廿日市庄屋山田治右衛門兩人を仲介にして広島藩へ用地の提供を願い出、廿日市船屋敷地が、寛永八年（1631）許可された。



参勤交代など上方との往来には日本海ではなく、陸路津和野を発ち、津和野街道を南下し、藩御船六日市本陣、大原本陣、廿日市の船屋敷に止宿した。この船屋敷を中継して瀬戸内海を海路兵庫県室津まで参勤交代や特産の石州和紙など物資の輸送で往来していた。

船屋敷は桜尾城址の西側にあり、屋敷の南側には船の出入りができ、物資の積み込みを行っていた。停泊時の船は御船入のある城址の東側の港に係留されていた。

稲生社 廿日市市桜尾本町 稲生社（漢字一字注意、一般的な稲荷ではない）は津和野藩御船屋敷に祀られていた。

津和野の太鼓谷稲成神社（注:太鼓の支ではなく皮）の分神を祀る。

石灯笼には寛政3年（1791）の寄進とある。



あんざいしょあと

明治天皇行在所跡

廿日市市天神

明治天皇の巡幸

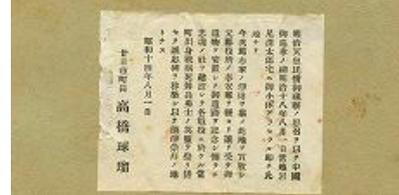
明治18年（1885）7月26日から明治天皇六大巡幸の最後となる山陽道巡幸が開始された。

明治天皇は北白川能久親王殿下、参議兼宮内卿伊藤博文侍従長、徳大寺実則等を従え、東京を出発され、海路山口県に向かわれた。7月31日に広島県厳島の大聖院に一泊された。翌8月1日に厳島を海路出発され、明治天皇上陸のための長さ四十二間・幅三間・高さ一丈と、長さ十二間・幅二間・高さ一丈の二箇所のの棧橋が築造された阿品のおあがり場に上陸された（現在「お上がり場公園」に西幸（さいこう）記念碑が建っている）。



陸路広島に向かわれる途中、人力車で廿日市に入られ岩尾澤太郎邸でお休みになり、広島へ向かわれた。このとき、佐伯好郎少年が出仕された。明治天皇巡幸の際の遺蹟が残り、かつては地域で最も神聖な場所とされ、清掃と敬礼を欠かさなかったという。その後、昭和14年(1939)8月1日に招魂社が建立された。

※ 行在所（あんざいしょ）とは天皇が外出したときの仮の御所。



真言宗本願寺派 宗像山 正蓮寺 廿日市市天神 5-7

慶長 2 年(1597) 僧安西開基 本尊 阿弥陀如来立像

僧安西は大和国奈良の人。俗名を宗像武蔵と云い、四十余歳のとき廿日市に来て真宗に帰依し一寺を建立した。

廿日市鑄物師(いもじ) 貞享 5 年(1688) 山田治右衛門貞栄作の梵鐘があったが、昭和 17 年太平洋戦争時供出され今はない。

7 年後の昭和 24 年に、住持宗像仏手柑は

俳句の師高浜虚子の句入り梵鐘「結縁は疑も無き花盛 虚子」を鑄造した。

**天満宮** 廿日市市天神 3-2

祭神 天満宮管公坐像

承久 3 年 (1221) 厳島神主を命ぜられた周防前司藤原親実が鎌倉から下向して桜尾城に入り、天福元年 (1233) 桜尾城主の厳島神主家藤原氏が藤原氏の氏神であった鎌倉の荏柄 (えがら) 天満宮を勧請したものと伝わる。

天文 10 年 (1541) 友田興藤が桜尾城に火を放ち自決し、藤原神主家の滅亡後は新八幡・新宮を合祀して廿日市の氏神として祀られるようになった。

江戸時代は正覚院が天満宮を祀っていたので天神坊と呼ばれていたが、明治の神仏分離により、分離して祀られるようになった。

**高野山真言宗 篠尾山 正覚院** 廿日市市天神 3 - 1

本尊 不動明王立像

正覚院は、真言宗 篠尾山(ささおやま)と号し、天平(てんぴょう)九年(737)行基菩薩開基と伝えられる。桜尾城主である厳島神主家藤原氏が天福元年(1233)鎌倉の荏柄(えがら)天神を篠尾山に勧請したことから天神坊と唱えられてきた。

境内に廿日市市重要文化財で旅の守り神とされる十王像があり、廿日市宿に入った旅人はまず十王に今回の旅の安全を祈願し、再び西へ東へと次の宿へ急ぐのであったのであろうか。

**廿日市本陣跡** 廿日市市天神

江戸幕府は、寛永 12 年 (1635 年) に徳川家光によって徳川將軍家に対する軍役奉仕を目的にによって全国の大名に参勤交代を制度化した。

西国街道は寛永 10 年 (1633) の幕府巡見使の視察を機に整備された。

廿日市宿駅が設けられ、大名や幕府役人などの宿泊や休憩にあてる施設として本陣も宿場町の中央に整備された。廿日市宿の本陣役は山田次右衛門が代々世襲して勤めた。本陣は現在の廿日市中央公民館の東側、南は海岸までと推定される 18 室を備えた広大な屋敷であった。山田氏は厳島社造営の金具鑄造のため鎌倉より厳島社神主家藤原氏に随伴して廿日市に下向したと伝えられる。山田氏の鑄造活動は永享 9 年 (1437) から天保 15 年 (1844) の間約 400 年間余に及ぶ。

※ この写真は角地桧山家の移転前のものである。現在は更地との上に新築民家が建つ。



佐伯郡役所跡 廿日市市天神

古代の安芸国にあった佐伯郡はもっと広く、現在の広島市安佐南区の大半と安佐北区の一部をも含んでいた。平安時代末期ごろに佐東郡（後の沼田郡）と佐西郡に分割され、江戸時代の寛文4年（1664）に西側の佐西郡が再度佐伯郡に改称された。

明治11年（1878）「郡区町村編成法」により、郡行政の執行にあたる機関として、佐伯郡役所は廿日市に置かれた。

郡内の教育振興、産業の振興を図ると共に、町村里道や港湾の改修等土木事業を行なった。

大正12年（1923）郡制廃止後の大正15年佐伯郡役所は廃庁となった。

その後、土木事務所・地方事務所等の県の出先機関として使用されたが、昭和46年（1972）公民館建設のためその姿を消した。

平成28年（2016）4月4日（月）この地に再び新しく中央市民センターが誕生する。

**真宗本願寺派 慈恩山 蓮教寺** 廿日市市天神 3-6

永正11年(1514) 僧誓珍開基 本尊 阿弥陀如来立像

元は、佐伯郡高井村(広島市佐伯区五日市町大字高井?)にあって真言宗慈恩寺と称していたが、永正3年(1506)2月浄土宗に改宗。大永7年(1527)光禅寺祐仙の次子常念が下平良に一寺を創建し蓮教寺と称した。のち空西のとき元和3年（1617）廿日市天神に移った。

享和元年（1801）12月広島島妙蓮寺弟子大龍（だいらゅう）が第十世住職となる。

寛政9年（1797）から文化3年（1806）にかけて浄土真宗本願寺派に起こった「三業惑乱（さんごうわくらん）」つまり三業帰命説（さんごうきみょうせつ）の成否をめぐる論争で新義派の智洞の説を批判する古義派を代表して文化元年江戸で大瀧（だいえい）は智洞と対決したが文化元年5月4日没した。大龍は大瀧の弟子として三業帰命説の排斥に努めた。幕府寺社奉行の裁断で三業帰命説は不正義という形で一応の解決をみる。

本堂前のソテツは津和野藩御船屋敷のお茶屋前にあったものが移植された。

**住吉神社** 廿日市市住吉1丁目 往時潮音寺の境内社であった住

吉の神は海上安全守護神として住吉新開の埋立に伴い三度遷座された。

住吉三神 とは底筒男命（そこづつのおのみこと）・中筒男命（なかづつのおのみこと）・表筒男命（うわづつのおのみこと）。昭和五十八年昭北新開県道拡幅の時に、天満宮に向いていたのを海に向け替えられた。境内には赤花崗岩に芭蕉葉に初冬の湊の賑わいを詠んだ句が彫られた句碑がある。芭蕉作と伝えられきたが、古典俳文学大系 芭蕉発句誤伝の部 元禄十年真木柱の句集より、北村湖春（こしゅん）の作とされる。芭蕉は湖春の父北村季吟（きぎん）の弟子であった。

「によきによきと 帆はしら寒き 入江かな」

祭礼は旧暦6月28・9日であったが、昨今の世の流れで今ではそれに近い日曜日に行われている。



浄土宗 松風山 潮音寺 廿日市市須賀 9 番 31 号

永禄 9 年 (1566) 僧金川龍天開基 本尊 阿弥陀如来立像(三尊来迎仏)
境内に巖島光明院開基 以八上人の墓がある。

奈良の當麻寺(たいまでら)と同じ構図のもつ浄土曼荼羅(絹本縦 187cm,
横 177cm) が秘蔵されている。

幕末の慶応 3 年秋、武力討幕準備の進展とともに、広島藩で編成された土庶混成軍「応変隊」が結成された処でもある。

隊士は奉行・神尾尚太郎以下 2 2 0 人。応変時は鳥羽・伏見の八幡山攻撃に 1 2 0 名、日光口より会津攻撃には 2 3 1 名が参加した。明治 5 年 2 月 1 5 日解散。

(参考) 戊辰戦争 日光口従軍隊其二 応変隊 「芸藩志 129 卷」 東広島市立中央図書館蔵

**日蓮宗 長栄山 常国寺** 廿日市市 2 丁目 4 番 12 号 永正 12 年(1515)

僧日政開基 本尊 日蓮上人坐像 山門前に日蓮

宗宝塔がある。慶安元年 (1648) 建立のお題目碑で高さ

260cm もある近在では大型である。市重文。境内に
は鋳物師 (いもじ) 山田右衛門家の墓がある。

**真宗本願寺派 護念山 光明寺** 廿日市市 2 丁目 4 番 18 号

天文 15 年(1546) 僧鎮光坊円尊開基 本尊 阿弥陀如来立像

僧円尊は毛利元就の四男穂井田元清 (ほいだ もときよ) の家臣渡辺与右衛門慰清正という。嫡子の早世に悲嘆し剃髪。

境内の墓苑に、この地方で最初に行われた人体解剖の碑がある。

**真宗本願寺派 宝州山 常念寺** 廿日市市 1 丁目 5 番 19 号 永正

11 年(1514) 僧誓珍開基 本尊 阿弥陀如来立像 特筆すべきは、

「堅田(かたた)源右衛門の首」伝説の堅田(かたた)源右衛 門の像がある。



文明十二年 (1480) 山科に念願の本願寺御影
堂 が完成する。門徒衆は三井寺に親鸞聖人の

御像 の返還を求めると三井寺はそれは出来ぬ、信徒衆の首を二つ持ってくれ
ば返してやると無理難題を持ち出してきた。これを伝え聞いた蓮如上人は、

困惑 され日夜心痛なされていた。当時光徳寺の門徒衆に篤信の源右衛門・
源兵衛という漁夫の父子がいた。この難題に 源右衛門・源兵衛親子は、日

ごろのご恩に報いたいと、首を差し 出す決意をした。こうして堅田の源右
衛門は息子の源兵衛の首を持参し、もう一つは自分の命

を差し出すからと返還を懇願する。三井寺は堅田の源右衛門・源兵衛親子の殉教心に感じ入り、御真影と源兵衛の首を返してくれた。その後父源右衛門は、諸国巡礼の旅の末、備後国 (広島県) で没したと伝えられている。

なぜ廿日市の地に、堅田(かたた)源右衛門の像が伝承されているのか、当寺でも不詳である。



福佐売神社 廿日市市廿日市可愛

西国街道町屋通り終端の可愛川の手前の右に参道あり、その奥まった突き当りに鎮座。



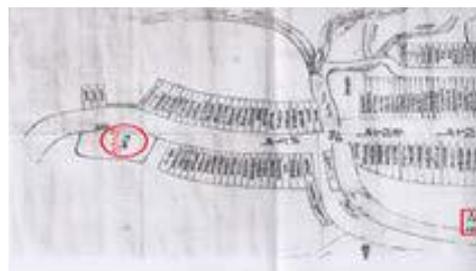
「三代実録」に貞観 14 年（872）12 月 26 日の条に、この土地の人安芸国佐伯郡 榎本連福佐売（えのもとのもらじふくさめ）を賞し位階を与え、戸内の祖を免除し、その貞節を村の入り口の門のかどに表彰したとの記録が見える。江戸後期まで福島社（福島明神）と呼ばれていた。江戸後期に福島社の地が榎本連福佐売の所居の地であるとされてから、福佐売神社と呼ばれるようになったようである。

口屋番所跡 廿日市市河愛

おくちや

御口屋・材木町

廿日市は佐伯郡山間部からの林産物の集積地となり、近世以前から材木商人が多く集まって東・西材木町が成立した。



20 玖波口屋番所跡
 元和5(1619)年、広島藩が玖波・廿日市などに材木留奉行を置き、材木の搬出を取り締まったのが口屋番の起りという。
 藩の勘定奉行は、林野生産物の取り締まりを行い、木材・炭・薪を口屋番所を通して藩の納屋所へ納めさせ、諸方へ売りさばいた。また、同時に税も取り立てた。
 「周防秋穂八幡宮旧記」の応仁元(1467)年の記事に「久波津問丸(問屋)が、八幡宮建設に必要な木材を吉和村から切り出したとある。
 玖波は古くから木材の集積地で、現在も木場という小字名が残っている。

また、町の西入口には口屋、東材木町浜寄りに ^{くちや} 十分 ^{じゅうぶんいっしょ} 一所の番所を置いて林産物の運上銀を徴収していたことが知られている。

左図は玖波の事例。

(参照)

廿日市町絵図 伝 寛文年間 1661~72

廿日市町史資料編Ⅱ 附録①

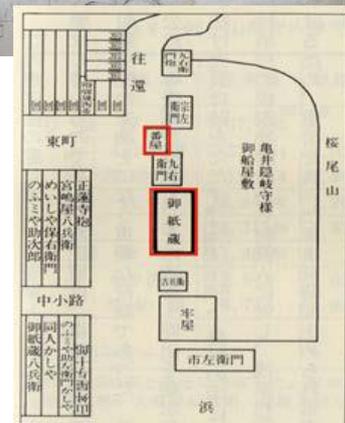
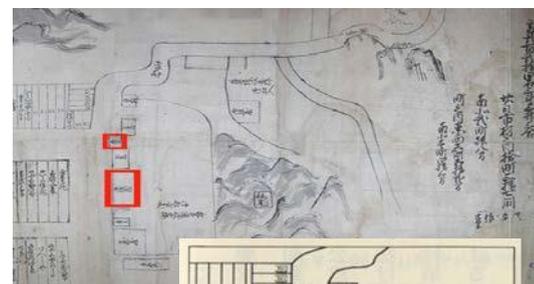
「ふるさと大竹 歴史探訪」～西国街道を訪ねて～⑧

御紙蔵・番屋跡 廿日市市桜尾本町 元和廿～寛永期（1615～44）頃は藩の統制もなく和紙 は自由に生産・販売が行われていた。慶安～承応年間

（1648～55）頃から藩による強制的買い上げによる統 制策をとり始めた。寛文年間（1661～72）の絵図には「御紙蔵」がみえる。広島城下のほかに、藩内での紙生産が行われていた

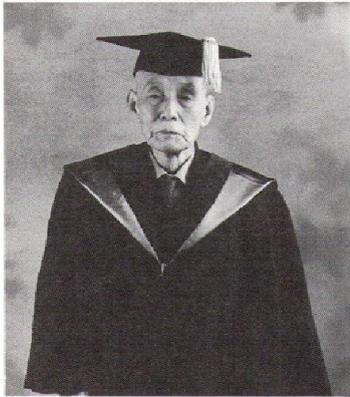
佐伯郡の中心地である廿日市にも紙蔵を設けるなど、整備が図られた。（参照 廿日市町絵図 伝 寛文年間 1661～72 廿日市町史資料編Ⅱ 附録①）

（御紙蔵位置絵図 廿日市町史通史編（上）694 頁）





廿中誕生秘話



佐伯好郎博士

母校のもといをたてた人

かくして廿中は誕生

佐伯好郎博士すて身の努力

今から10年前には、「自治警察」設置と「新制中学校」の設立とは、各町村のむずかしい問題の一つであって、これが、町村長の「命とり」だとさえ言われたのである。わが廿日市町でも大いにこまっていたが、どうなり、こうなり、「自治警察」を置き、「廿日市中学校」を新設することができたのである。

私が最も苦心したのは土地と建物の確保であった。最初は、地御前の現在の綿麻会社の土地23,000坪と建物2,500坪を800万円で買受ける案であった。

ところが地元の地御前村長が大いに反対し、つづいて原や平良が反対した。そこで、私が目をつけたのが現在の廿中の土地である。宇品造船会社所有の荒地で、どうにもなりそうもない土地が20,000坪あったのである。これに着眼して買取りに要する資金を借用するつもりで、当時の芸備銀行の副頭取であった伊藤豊氏を訪ねてお願いしたところ、みごとに拒絶せられた。そこで、私は大いに憤慨して、その帰路、宇品造船所長に面談して、20,000坪全部について買受けの交渉をした。

一坪145円、即ち290万円で全部買い取り、10,000坪を分与することに決したのである。ただ問題は、手附金30万円の支出方法がなかったから、議会の承認を得て、私自身の単独責任で支払った。もし万一、10,000坪の分譲地が予定通り300万円に売れなかったならば、私は腹を切らねばならない立場に立ったのである。ところが天は、未だ私をすて給わないとみえ、午前8時から、午後2時までに約300万円の金が入った。これで廿日市中学校の土地はできたのである。——創立10周年記念誌祝辞より——